

令和元年6月19日現在

機関番号：35404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K21543

研究課題名(和文)ポストヒューマニズム的な萌芽の解明 フランツ・カフカを中心に

研究課題名(英文)The Buds of Franz Kafka's Posthumanism

研究代表者

山尾 涼(Yamao, Ryo)

広島修道大学・人文学部・准教授

研究者番号：70639608

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：2017年度には招待講演を一度行い、2016、2018年度にはそれぞれ紀要論文を一本ずつ発表した。本来は毎年学会発表一回と査読付き論文一本の執筆を目標に掲げていたが、達成できなかった。学内で役職に就きエフォートに大幅な変動があったことが原因である。最終年度には、当初の「研究の目的」に掲げていた、「ヒューマニズムに最初の衝撃を与えた人物としてダーウィンを描定し、進化論をドイツで広めたヘッケル、それを支持したニーチェ、フロイトなどの理論とカフカの洞察を交差させつつ、ポストヒューマニズム的な萌芽を文学・思想史に探る」というテーマに沿って執筆した。研究の最終目的にはおおむね至ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

調べた範囲においては、これまでにニーチェ、フロイト、カフカという三者の人間観および身体観に関する洞察の共通性について論じた研究は見当たらなかった。ヒューマニズムへの懐疑の発生と、ポストヒューマニズム的な言説を彼らのテキストの中に探るといったテーマに関しても同様であり、テーマ設定自体においては十分に研究する意義のあるものだったと考えている。だが、テーマの斬新性は、研究自体の困難さにも繋がり、予定よりもはるかに年数が必要な研究であると判明した。今後も同テーマで研究を行い、論文もしくは著書の発表や学会での発表によって社会へと還元していく。

研究成果の概要(英文)：This research tries to take a literary and philosophy approach to the following 3 points. 1. Did Franz Kafka attempt to re-ideate in his texts humans and the human body so as to catch them from the original aspect? 2. In this regard, is his stance similar to the aspect of actual posthumanism? 3. Can we identify genealogy of the birth of skepticism to humanism and the posthumanistic discourse, when we go back in German literature and philosophical history and utilise Kafka's texts as a key? In this research, I will set Darwin as the first person, who gave humanism a shock, then I will interpret the theories of Nietzsche, Freud and Kafka's insight to humans and the human body, then I want to analyze the buds of Kafka's posthumanistic aspect. Result: two papers (2016, 2018) and one presentation (2017).

研究分野：ドイツ語圏文学

キーワード：フランツ・カフカ アントロポロギー 近代以降の人間観

1. 研究開始当初の背景

ドイツ語圏作家であるカフカを軸として、ヒューマニズムの発生から、作家に関係する思想家たちの人間中心主義に対するさまざまな反応(ダーウィン、ヘッケル、ニーチェ、フロイト等)そして彼らが構築した独自の人間像および身体観を分析し、最終的にはカフカと彼らの洞察の中に現代に至るポストヒューマニズムの萌芽を見出し、身体と生にまつわる現代的な問題の解決の糸口を探りたいと考えたことが、研究開始当初の目論見であった。

そもそもポストヒューマニズムとは、総括すれば 20 世紀後半に提起されたものであり、ヒューマニズムと人間主体に関する想定への反論である。また、<人間>の意義を見直して再概念化し、それと同時に身体概念をあらためて構築しようとする試みであるともいえる。この概念の“*New Keywords. A Revised Vocabulary of Culture and Society.*”(Tony Bennett 2005)の定義をまとめると、以下ようになる。

1. 従来のヒューマニズムに対抗する姿勢
2. 人間中心主義的ではない存在のあり方を示唆する試み
3. テクノロジーを介した人間の力量や潜在能力を超える活動形態の分析
4. 「人間ならざるもの」non-humans との関係、とりわけ動物や機械との新しい関係の形成を希求する姿勢

さらに同書によれば、「人間の権力、自立性、特殊性、自己同一性などに関する疑問、そして「人間と人間ならざるものとのあいだの差異を絶対化する」欲望に関する疑問」がポストヒューマニズムの提起する主題である。ポストヒューマニズムの「人間の権力、自立性、特殊性、自己同一性などに関する疑問」という問題提起が、カフカの作品にも萌芽という形で存在しているのではないかと、またそれが現代的な<人間>像の解明に応用可能なのではないかとについて明らかにすることまでを、当初は意図していた。

本研究テーマの着想を得たきっかけは、以下の雑誌へと遡る。2008 年に刊行された雑誌「表象」2 号では、<ポストヒューマン>というテーマが論じられていた。その中で門林氏は、現代におけるヒューマニズムの問いなおしの契機について、以下のように喚起した。「全面的に浸透しつつある情報技術によって、自由主義的で人間主義的な主体、ひとつの身体において統合された主体のあり方はもはや終焉しようとしているのではないかと。私たちはますます、脱身体化された情報のパターンとして自らの生を生きるようになってきているのではないかと。」

しかし、生まれ持った本来の身体からテクノロジーによって逸脱していく人間像とは、21 世紀に固有のものなのだろうかと本研究は疑った。18 世紀に神経が電気的性質のものだと発見したガルヴァーニへ遡ると、電気という非物質的な信号で、筋肉がコントロールされるという身体イメージはすでに脱身体的である。また、人間と機械との関係の推移というテーマは、文学では 19 世紀にメアリー・シェリーの怪物や、ジャン・パウル機械男、ホフマンの描くオートマターなどにも表れている。

20 世紀に関してはどうかと先行研究を調べると、カフカ研究者のゲルハルト・ノイマンが、身体に対する文化的加工が、DNA の視覚的解析という物理的操作が行われる以前にも、カフカの時代にすでに「生政治」という形式で存在していたと指摘している(Neumann 2012)。

そのような時代とそこに生きる人間をカフカがいかに洞察したかについては、アドルノの以下の表現が端的に表していた。「カフカの魂の有効性への懐疑は、フロイトのそれよりもさらに強い」(Adorno 1977)。この言葉を言い換えれば、現代において一層重大性を帯びてきつつある身体および人間の定義に関する問題を、カフカは先取りしていたとはいえないか。つまり、人格を身体的な衝動の組織原理に至るまで解体し、そこから人間を新たに再構築して描き出そうとする試みを、カフカは執筆において実行したのではないかと問を本研究は立てた。そのカフカの試みとは裏を返せば、従来の人間観および身体観の基盤を成していた、当時のヒューマニズムを見直そうとする試みであるとはいえないだろうか。

ヒューマニズムという言葉について確認すると、16 世紀頃までにヨーロッパに展開したルネッサンス期に、主要な行為者及び自然の支配者として世界の中心に人間を据えたことに始まる。自然の支配という表象は、身体と精神とを二分して捉える 17 世紀の哲学者デカルトに端を発しており、精神を身体の上位に定める心身二元論はヨーロッパ哲学、とりわけ啓蒙哲学の語る理性への信頼の根底を形成した。それと平行して世界の中心者としての<人間>像が、白人の男性を規範としており、その枠からは女性、障害のある者、有色人種、動物などの多くの例外を生み出しつつ、また、理性の下位である<身体>そのものが無視されてきたことも事実といえる。

カフカの作品には、当時のヒューマニズムの中心から零れ落ちた存在を掬い上げて、その存在のバリエーションを描き出そうとする視点が垣間見ると同時に、彼の時代のヒューマニズムにおける上述した一種の歪みを浮き彫りにしようとする意図を読み取ることができる(学会発表 申請者山尾 2015)。申請した本研究では、2015 年に山尾がカフカの短編小説におけるポストヒューマニズム的な萌芽というテーマで取り組んだ研究に基づいて、発展を試みた。カフカを軸として、ヒューマニズムの発生から、作家に関係する思想家たちの人間中心主義に対

する様々な反応（ダーウィン、ヘッケル、ニーチェ、フロイト）と、彼らが構築した独自の人間像および身体観を分析し、最終的にはカフカと彼らの洞察の中に現代へ至るポストヒューマニズムの萌芽を見出し、身体と生にまつわるアクチュアルな問題の解決の糸口を探ろうと本研究はテーマを定めた。

2. 研究の目的

本研究は主に、以下の3点を明らかにすることを目的としていた。

1. ドイツ語圏作家フランツ・カフカのテキストには、人間と身体を新たに再概念化して、独自の視点から捉えなおそうとする姿勢が読み取うるのではないか？
2. その姿勢とは、現代におけるポストヒューマニズム（脱人間中心主義）的なスタンスと重ねられるのではないか？
3. さらにカフカに座標を定めて、ポストヒューマニズム的な視点の系譜を近代以降のドイツ文学・思想史の中へと遡上すれば、ヒューマニズムへの懐疑の発生からポストヒューマニズム的なディスクールに至るまでを俯瞰できるのではないか？

ヒューマニズムに最初の衝撃を与えた人物としてダーウィンを措定し、進化論をドイツで広めたヘッケル、それを支持したニーチェ、フロイトなどの理論とカフカの洞察を交差させつつ、ポストヒューマニズム的な萌芽を文学・思想史に探ることを主たる目的としていた。

また、本研究は最終目標として、近代以降の〈人間〉にまつわる様々な思想家たちのディスクールをカフカのテキストと交差させつつ分析することで、ドイツ語圏における人間像および身体観の系譜を捉えなおし、現代における人間と身体にまつわる諸問題と結びつけて論じることを目指していた。細胞構成医療や身体をサイボーグ化する技術、また脳死にまつわる死の定義や安楽死の問題など、現代における身体そして人間の定義は、改めて考え直さなければならない時代にあるといえる。わたしたちの身体を真に所有しているものはなにものか。自分自身なのか、あるいはテクノロジー／政治なのか。また〈人間〉とは、現代ではどのように定義可能であるのか。人間と人間以外の線引きを行うことは、現代においてどのような意義をもちうるのか。つきつめれば人間の〈かけがえのなさ〉を支えているものとは何なのか。以上の問題を近代以降の思想史と絡めつつ、カフカのテキストから論じることは、生を言語化する困難が先ずる上に、現実的な命の問題と文学的なテキストとを関係させる困難さが問われることは承知していた。しかし、それゆえにこれまでに扱われたことのないテーマだといえるし、また、研究を行う意義があるとも考えていた。

3. 研究の方法

本研究は文学、思想研究であった。したがって、以下の手順に則って研究を行った。

1. 年度ごとに計画していた研究テーマに則して、類似した文献や論文などの先行研究が発表されていないかを調べる。似たような研究テーマを扱っていると懸念される文献が見つかった場合は、入手して精読する。テーマや内容に先行研究との重なりがないか、また自らの研究テーマが独創性を有するかどうかを常に調べる。
2. 先行研究をふまえて、論文を執筆する。学会発表などで成果を発表する。

カフカの人間像、身体観が従来のもとのような点が異なっているのか、また、その独自性を解明するためには、まず当時（カフカ 1883 - 1924）の〈人間〉をめぐる言説を分析することが前提として必要である。したがって本研究は、以下のような計画を立てた。

- a. 近代以降のドイツ語圏の人間観に大きなインパクトを与えた人物としてまずダーウィンを取り上げる。ダーウィニズムとカフカの関係性にまつわる先行研究は、論文集であるKafka-Handbuch(2008)や先に挙げたノイマン、川島（2013）の研究もあり、これらをふまえてカフカの人間像と同時代の言説にまつわる考察を行う。
- b. その後、当時のドイツ語圏におけるヒューマニズムに大きな影響を与えたヘッケルとニーチェの人間像および身体観について分析し、その影響をカフカのテキストの中に探る。
- c. カフカと同じ時代に生き、さらに新しい〈人間〉像を発見した人物として、フロイトとカフカの身体観を比較する。両者の洞察において、身体に潜む他者性を発見したという意味で共通性があることは、申請者山尾の科研費研究成果でも明らかになっている（山尾 2014,2015）。

前回の研究をふまえて、ヒューマニズムへの懐疑という観点から、両者の言説について考察する。

d. c と同様の観点において、ニーチェ、フロイト、カフカの言説を比較し、共通点を探る。

4. 研究成果

2017 年度には招待講演を一度行い、2016、2018 年度にはそれぞれ紀要論文を一本ずつ発表した。本来は毎年学会発表一回と査読付き論文一本の執筆を目標に掲げていたが、達成できなかった。研究の進捗は当初予定していたよりも滞った。その理由は、研究を開始する初年度に他大学へ赴任することとなり、その結果、当初 30% を予定していた本研究に対するエフォートが、20-15% 程度まで落ち込んだことによる。その後、2018 年度には学内で役職についたため、研究に時間を割くことがより困難となった。しかし、最終年度には、当初の「研究の目的」に掲げていた、「ヒューマニズムに最初の衝撃を与えた人物としてダーウィンを措定し、進化論をドイツで広めたヘッケル、それを支持したニーチェ、フロイトなどの理論とカフカの洞察を交差させつつ、ポストヒューマニズム的な萌芽を文学・思想史に探る」というテーマに沿って執筆することができた。

また、本研究が当初に掲げていた目標を達成するためには、研究の対象領域が文学や思想だけに留まらないことから、3 年間の研究期間では時間的に解明しきれないと実感した。カフカ、ニーチェ、フロイトが、当時のヒューマニズムに対して強い懐疑を抱いていた点やそのスタンスがポストヒューマニズム的な萌芽と点などに関しては研究期間内に発表した論文で論じることができたが、それが現代におけるポストヒューマニズム的な視点と如何に結びついているのかを、具体的な問題（例：サイボーグ化される身体、ヒューマンとノンヒューマンの関係、細胞構成医術、安楽死等）と関連させて論じるころまでは至れなかった。

今回の科研費で当初計画しながらも、達成まで至れなかった内容については、今後も研究を継続して、論文や学会発表などを通じて社会へ還元できればと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

山尾 涼：「退化の孕む美とグロテスク フランツ・カフカと中島敦の人間観 / 動物像」、『広島修大論集』、査読なし、57 巻、2016、65-81 頁。doi/10.15097/00002409

山尾 涼：「文化の病いと人間獣 ニーチェ、フロイト、カフカ」、『広島修大論集』、査読なし、59 巻、2019、189-204 頁。doi/10.15097/00002758

〔学会発表〕(計 1 件)

山尾 涼：「文化の病いと人間獣 ニーチェ、フロイト、カフカ」、『日本オーストリア文学学会、2017 年（招待講演）』

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況 (計 件)

名称：
発明者：
権利者：

種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。